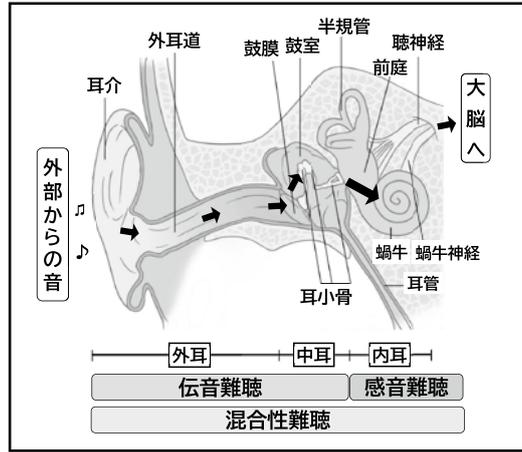


第1話 「難聴の種類」

鳥取大学耳鼻咽喉科頭頸部外科の矢間です。平素は大学病院において耳科疾患の診療を担当しております。今回は難聴についてお話をさせていただきます。



保健現場レポート

鳥取大学医学部附属病院
耳鼻咽喉科頭頸部外科
医師
やざま ひろあき
矢間 敬章 384

【耳の構造と難聴が起こる仕組み】

耳は外耳・中耳・内耳という3つの部分から成り立っています。外耳に入った音は中耳で音圧を増幅させ、内耳にある蝸牛と呼ばれる器官で音の振動を電気信号に変換します。電気信号に変換された音は聴神経を伝わり、脳幹を通じて大脳へ伝わり、音と認識されます。難聴はこの3つの部分のいずれか、もしくは全てが障害されることで起こります。

【難聴の種類・病態】

難聴には3つのタイプがあります。「伝音難聴」と「感音難聴」、およびこの二つの難聴が組み合わさった「混合性難聴」です。

① 伝音難聴

「伝音難聴」は、特に外耳と中耳に病気がある場合に生じる難聴です。文字通り、音を上手く伝えることができない原因がある状態です。例えば、耳垢が外耳道に詰まっていたり、鼓膜に穴が開いていたりする場合、音が上手く耳の中に入って行きません。また、中耳には、耳小骨という音を伝えるための小さな骨が繋がっています。この耳小骨の動きが悪くなったり、病気で壊れたりするなど連続性が途絶えることでも、音を上手く伝えることができなくなります。その他、鼓膜の奥

の部屋（鼓室）に水や膿がたまる中耳炎の時もこのタイプに当てはまります。

この「伝音難聴」は、裏を返せば音を上手く伝えられるように治すことができる難聴とも言えます。耳垢が詰まっているのであれば、掃除をすることでよく聞こえるようになります。また、鼓膜に穴が開いていればそれを塞ぐ手術をしたり、耳小骨が壊れたり動かなくなっていれば、それを作り変える手術をしたり、鼓室に貯留物があればそれを取り除いてあげることによって聴力の改善が見込めます。

② 感音難聴

「感音難聴」は、内耳や聴神経および脳などの機能が落ちるために生じる難聴です。これも文字通り、音を感じる能力が落ちてしまうことで生じる難聴です。「感音難聴」の病態は色々な原因が推測されていますが、なぜ神経機能が落ちたのか、はっきりとした原因が特定されにくい難聴です。

結局、加齢に伴う難聴であるとか、突然生じた場合は突発性難聴であるなど、推定病名しかつかないこともあります。急激に発症した場合は、治療により改善することもあります。難聴が生じても放置していたり、長い年月をかけて難聴の進行が見られたりする場合、治りにくい病態です。難聴を自覚した時には、なるべく早く耳鼻科を受診することをお勧めします。

③ 混合性難聴

「混合性難聴」は、「伝音難聴」と「感音難聴」が組み合わさった難聴です。一番多い原因は中耳炎です。中耳炎の影響で耳小骨の動きが悪くなったり、鼓室に水や膿がたまったり、鼓膜が破れて耳だれが出たりするなどの症状で伝音難聴を生じ、さらに内耳にも炎症が広がって、聴神経の能力を落とすという病態が考えられています。中耳炎は放置せずに早めに適切な治療を受けることをお勧めします。

【聞こえにくいな」と感じたら…】

難聴を自覚した際は治療が可能な病気があるかどうかを判断するため、まず耳鼻科を受診することが大切です。治療が難しい場合には、難聴の程度が補聴器を使うのに見合っているかどうか、相談すると良いでしょう。中には補聴器の効果が期待できないくらい高度の難聴になっていることもあるかもしれませんが、人工内耳という道具も近年広まってきました。全く聞こえなくなってきたとしてもすぐには諦めず、耳鼻科で相談していただくのも良いかと思えます。

※次号では、「老年性難聴」について掲載予定です。

